原　著

日本における猫の歴史―近世―

柴 内 晶 子[1]

はじめに

筆者は『日本獣医史学雑誌・第57号』に，日本の猫に関する古代から中世の歴史を，獣医史学的な視点で調査した「日本における猫の歴史―古代・中世―」を報告した。[1] この報告の末尾に記載したように，「猫の草紙」によれば，[2] 江戸幕府が誕生する前年の慶長7(1602)年に徳川家康により「猫の放し飼い令」が発布され，猫をつないでおくことや売買することを禁じる御触れの高札が，京都の一条の辻に立てられて全国的に波及したことは，日本の猫の歴史にとって大きな転換期となった。今回は江戸時代を中心に近世の猫の歴史を考察したので報告する。

江戸時代は猫に関わる絵画や逸話などが一気に増えた時代であり，一般市民の生活の中に猫の存在が大きくクローズアップされた時代でもある。それまでは貴重な生き物として高額で取引され，主に皇族，貴族などの上流階級が所有して紐で繋がれて屋内で大切に扱われてきた猫が，広く庶民に普及し，市中での鼠の被害を軽減するための益獣として広く認知されて行くことになった。

この時から猫は自由に市井に放たれて生きるようになった。天下泰平の時代になって大きく花開く江戸文化の中で，猫は上流階級から庶民までのあらゆる階層の人々の間で，様々な文化的作品に取り上げられて百花繚乱の時代を迎えたのである。[3~9]

1. 益獣としての猫

徳川家康による「猫の放し飼い令」が発布される以前の猫は，皇族，貴族などの特権階級の間で愛でられる高価な動物として，逃げないように屋内で紐などに繋がれて暮らしていた。古代に猫が輸入された理由には貴重な書物や重要な穀物を鼠害から守るためとされているが，江戸時代になって国内に広く定着した後は，日本各地で盛んになった養蚕農家での需要があったとされている。

鼠は蚕の幼虫やせっかく繭になった蛹を食べてしまうので，鼠害対策として猫が珍重されたのである。しかし，当初猫は需要に対し数が少なく，それまで

SHIBANAI Akiko : The History of Cats in Japan ―The Early Modern Period

1. 連絡先：柴内晶子　〒107-0052 東京都港区赤坂4-1-29 赤菱ビル2F 赤坂動物病院院長
TEL 03-3583-5852

(2021年10月20日受付・2021年10月28日受理)

の時代の高価な贅沢品としての価値とは異なる意味で貴重な存在であり，鼠駆除のための呪絵として猫絵が隆盛したと言われている。上州新田岩松家の殿様が養蚕家のために描いた猫絵や歌川国芳の「鼠よけの猫」などは良く知られている。[4,7,9,10,32)]

図1 貞斎泉晁・渡辺周渓画「たけの休」天保年間(1830〜1844)[32)]
「たけの休」とは蚕の二度目の脱皮の前の休眠を示す。養蚕農家を描いた絵で，蚕の餌の桑の葉を運ぶ人，桑の葉を刻む人，運んできた繭を選別する人などがいる。中央付近と右端には首輪をつけた2頭の猫が，左後方の土間には農耕馬1頭がいる。この図は需要があり繰り返し描かれたもので，養蚕農家の作業場には猫がつきものであったことを示す絵である。

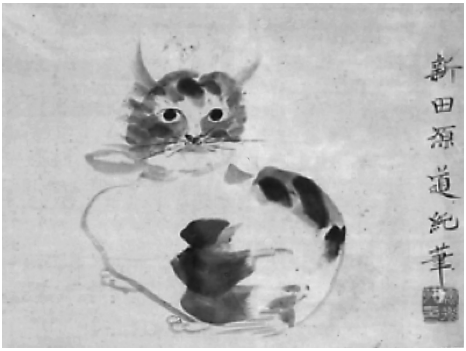

図２　上州新田岩松家の鼠よけの猫絵[32)]

図３　歌川国芳「鼠よけの猫」[32)]

こうした鼠よけの猫の絵を描いて売り歩く仕事を生業にする者や猫（他の動物も）の声帯模写をする「猫八」と呼ばれる芸人，猫ののみ（蚤）取りを商売にする者なども現れた。[10,11,12)]

徳川家康の御触れにより猫の売買は禁止されたはずであるが，平戸藩主だった松浦静山の「甲子夜話」には，養蚕農家が鼠を良く捕る猫は「猫の価五両位にて，馬の価は一両位なり」とあり，実際には大変な高額で売買されていたことが分る。[13)]

日本国内での絹の需要が高まり，その代価として支払われた銅が底をつくほどに中国から絹が輸入されていたとも言われている。その結果，国内で絹の需要をまかなうために，日本各地で養蚕が奨励されて隆盛したと考えられる。それに伴い，蚕を食べてしまう鼠の害に対抗するために猫は重宝がられ，猫神様として祀られた事例がある。以下に，猫を祀った神社について述べる。

阿豆佐味天神社：養蚕を守る神様として祀られている例として東京都立川市の阿豆佐味天神社が有名である。この神社の中の蚕影神社には猫神様が祀られており，さらにお参りしてお願いするといなくなった猫が帰ってくる，猫返し神社としても知られている。[14,15)]

美喜井稲荷大明神：筆者の職場である赤坂動物病院からごく近くの神社なので触れておきたい。ここは東京都港区赤坂青山通り沿いにある赤坂4丁目の虎屋本店ビルの隣の中2階にあり，この神社が火事になったとき，猫に助けられたが残念ながら猫は助けられなかったことから，ご供養と共にお祀りすることになったとされている。守護神は京都比叡山から御降りになった霊位の高い神様とのことだ。[16] この神社を信仰する者は蛸を食べてはいけないと掲示されているが理由はわからない。もしかしたら，猫が蛸を食べると下痢をしやすいことなどに由来するのかもしれない。

仙巌園内の猫神社：島津藩ゆかりの鹿児島の仙巌園には薩摩藩主の別邸があり，第17代の島津義弘が朝鮮出兵をした折りに，猫の眼の大きさ(虹彩の形)で時刻を知るため，7頭の猫を同行し，うち2頭が無事帰国したと言われる。その猫を祀った猫神社がある。[3,17,28]

図4　美喜井稲荷大明神(猫稲荷神社)の祠と案内板(港区赤坂4丁目)
「この神様にお願いする方は蛸を召上らぬこと。この神様を信仰される方は何事も心配ありません」と書かれている。(筆者撮影)

2. 猫の報恩譚

江戸時代後期の「宮川舎漫筆(みやがわのやまんぴつ)」には「文化13子年の春，世に専ら噂ありし猫，恩を報んとしてうち殺されしを，本所回向院(ほんじょえこういん)*江埋め，碑を建，法名は徳善畜男と号す，3月11日とあり,(後略)」(*両国回向院は墨田区本所地域内にあることから「本所回向院」とも呼ばれる)。

江戸両替町(場所不明)にいた時田喜三郎の飼い猫が出入りの肴屋に恩を返

した話。その猫は出入りの魚屋からいつも魚を貰っていたが，その魚屋が病気で臥せっているのを感じた猫は，主人家から封印されていた小判2両を2度までも咥えて逃げていったという。最初のときは持っていかれたが，二度目はこれを捕らえ，殺してしまったという。魚屋からことの顛末を聞いた主人の時田は，その後，両国の回向院にその猫を葬り，戒名徳善畜男とつけて供養したという。[18] 文化13(1816)年に埋葬されたというこの猫の貴重な墓は，両国回向院の墓地の小堂内に「猫塚」として今でも大切に保存されている。

図5　両国回向院の「猫塚」と案内板（筆者撮影）

3. 猫の墓石と戒名

東京都港区三田の伊皿子貝塚の発掘調査で，泉谷山大圓寺（曹洞宗）の境内跡から，明治時代の移転時に廃棄されたと思われる江戸時代の犬の墓石4基と猫の墓石1基がみつかっている。文政13(1830)年の犬の墓石には戒名「亀毛俊狗之霊」などが記されている。明和3(1766)年2月21日銘の猫の墓石「賢猫之塔」(高さ37cm×幅21cm)が5基中で最も古く，猫の合同供養塔ではないかとされている。[19, 20]

大圓寺は明治41年に杉並区和泉に移転したが，江戸時代を通じていわゆる大名寺だったとされ，犬の墓石銘には大奥や三田御屋鋪などが記されており，当時このあたりに屋敷を持つ大名として薩摩藩島津家があり，これらの墓石や慰霊塔の多くは島津家の犬と猫のためのものと推定されている。[20] 前述の朝鮮出兵の折の猫を祀ったとされる猫神社の話と併せて考えると，島津家では江戸時

図6　伊皿子貝塚遺跡で出土した猫の墓石「賢猫之塔」の写真と拓本[20)]

代にはすでに犬や猫を伴侶動物として大切に供養していた可能性がある。

東京都墨田区両国にある諸宗山無縁寺回向院(浄土宗)の過去帳には，犬猫の戒名11例(狆6・狗1・猫4)が記録されている。過去帳記載の猫の戒名・年月日・施主を年代順に並べると，①「猫畜門転生 天保12(1841)年9月25日 原房次郎」，②「善猫畜門転生 天保12年10月17日 白梅 取次 金吾」，③「遊猫畜門転生 天保12年12月8日 大和屋」，④「八猫畜門転生 嘉永5(1852)年2月19日 萬屋久蔵」である。全ての戒名に記載された「畜門転生」は家畜から人に生れ変るのを願うことを意味するが，①は施主名から武家の猫，②の善猫は生前の性質や関係を意味し，施主は女性であるが取次者の金吾の名は武士に多いことから武家の猫かもしれない。③の遊猫は生前の楽しかった思い出を現すと思われ，施主は商家である。④の八猫は8匹という複数の猫を供養したとされ，施主は商家である。[19)]

これらの過去帳記載の犬と猫の戒名は，人間の戒名と区別されずに一緒に並べて記されている。犬(狆)の戒名の中には「五百狆畜門転生 天保十(1839)年九月十四日 松平伊豆守殿奥方より，右墓相立候事」との記載がある。[19)] このことから現在では残っていないが，回向院でも戒名と同時に墓石を建て，また明治時代に移転する前の大圓寺でも墓石と同時に過去帳に戒名を記載していた可能性が考えられる。

日本最古の史実の犬の墓石は，江戸時代初期の建立で，長崎県大村市の萬歳山本経寺(日蓮宗)にあり，有名な「生類憐みの令」より35年も古いことが知られている。慶安3(1650)年銘の高さ1丈(約3m)の大村藩家老小佐々市右衛門前親の大型墓の隣には，愛犬の「義犬華丸」の高さ3尺(約90cm，当時の上級武士と同等)の墓石がある。[21~24)]

その後，今回の事例から判明したことであるが，江戸時代後半には，武家だけでなく，町方である富裕な商人層にも，犬や猫の供養のために戒名を付けて，高さ1～2尺(約30cm～60cm)の中級武士と同程度の墓石を建てる風習が広がっていたものと思われる。これらの事例から考察すると，江戸時代後半には犬と猫は人と同様に供養されており，特定の飼い主と深い絆で結ばれた伴侶動物だったことは明白であろう。

図7　大村藩家老小佐々前親の墓(左)と愛犬「義犬華丸」の墓(中央)
小佐々家子孫の小佐々学(日本獣医史学会前理事長)と実姉の柴内裕子
(赤坂動物病院名誉院長)[22~24]　長崎県大村市「国指定史跡・本経寺墓所」

江戸時代には，ほとんどの下級武士や一般庶民の墓は石碑ではなく，土盛の塚に木柱を建てただけの墓が多かった。全国各地にあった動物の墓のほとんどが土盛の塚のため，墓跡が残らなかったことから，現在まで石碑や神社として残る動物の墓は特例とされている。[24] 大圓寺跡出土の犬や猫の墓石や回向院の過去帳は，日本や世界の動物愛護史やヒューマン・アニマル・ボンドの歴史からも貴重な伴侶動物の遺跡である。

特に，猫は今まで注目されていなかったが，犬と同様に人と同等に扱われて

供養されていたことから，日本における猫の歴史研究は動物愛護史の視点から獣医史学的にも重要なことが判明したと言っても過言ではなかろう。

4. 猫の埋葬例

江戸時代の江戸は世界的に見ても大いに繁栄した都市であったことは広く知られている。江戸の遺跡からは犬や猫の骨が多数出土するが，特に武家屋敷跡からは丁寧に埋葬された状態で検出される事例がある。猫の事例は犬に比べて少ないが，東京都港区の汐留遺跡では埋葬されたと思われる猫の骨が2例出土している。[20)]

図8 汐留遺跡の埋葬された猫の骨［東京都埋蔵文化財センター］[20)]

5. 食用や毛皮に利用された猫

江戸の町では特に武家屋敷跡などから犬や猫を手厚く葬った遺跡が発見されている。反面，犬も猫も切痕のある骨も出土しており，当時は愛情の対象である伴侶動物として大切にされていた以外に，食用や毛皮，三味線などの面に使用するために解体された犬や猫もいたことが示唆される。[20)]

6. 富と長寿の象徴としての猫

中国では古くから猫と蝶の図柄の絵が富貴，豊穣と長寿の象徴とされていた。一説では猫と蝶の発音が中国の長寿を表すボウとテツと一致するためと言われる。江戸中期の鈴木春信の浮世絵では猫と蝶と牡丹が描かれているが，現存する猫の絵では江戸以前に同じようなモチーフで描かれたものは見つかっていない。[3, 4)]

7. 招き猫

現代では日本全国で福を呼ぶ猫として広く知られている「招き猫」であるが，そのルーツには諸説ある。右手を挙げている猫は金運を運び，左手を挙げている猫は幸運を招くと言われている。

東京世田谷の豪徳寺(曹洞宗)は，1633(寛永10)年に彦根藩主井伊直孝により再興された寺院である。鷹狩りに出かけた井伊直孝が小さな寺の前にいた猫に手招きされ，寺で休息したことで突然の雷雨を避けられ，庵主である老僧の法談も聞くことができたことから，この寺を井伊家の菩提寺と定めた。直孝の死後その墓の近くに猫塚が作られたことなどが招き猫信仰の始まりであり，招き猫発祥の地と言われている。[25,33)]

1688(貞享5)年頃から江戸今戸(現・江東区今戸)では，猫型の焼き物を作っていたとされる。[25)] 1721(享保6)年に江戸吉原京町の薄雲太夫を命がけで蛇から護った三毛猫の伝説がある。薄雲太夫の猫好きに日本橋の唐物問屋が長崎の伽羅の銘木で造った猫の彫刻を贈り，その猫型のレプリカが年の市で売られたのが，招き猫の始まりとする説もある。[25)] 1781(天明元)年頃に本所回向院の金猫銀猫という置屋で金銀の招き猫を飾ったことから，本所の芸妓や置屋で商売繁盛を願って広まったのが起源とする説もある。もともと招き猫は花街のものであり，遊女を示す隠語が猫であった。[25)]

1852(嘉永5)年に浅草花川戸で老婆が猫をかわいがっていたが，生活に貧し，猫を泣く泣く手放すこととなった時，夢枕に猫が立ち，「我の形を造らせ祀れば福徳は思いのままである」と話した事からその通りにした。すると，再び仕事を得て繁盛したことが噂を呼び，いつの間にか今戸焼きによる猫の形の土人形を

図9　今戸神社の拝殿と絵馬
境内には沢山の招き猫があり，絵馬の上部には「えんむすび」と書かれている。(筆者撮影)

祀る風習が生まれたとされる。[25] 今戸神社の境内には多くの招き猫がおかれ，縁結びで有名なこの神社の絵馬には一対の猫の絵が描かれている。

京都市の壇王林寺の黒招き猫はその発祥は定かではないが，日本最古の黒招き猫であると伝えられている。そのルーツは室町時代からの伏見人形からの派生の説もあるようようだ。壇王林寺は夜の守護神であり，人々を火災と盗難から守る主夜神を祀る日本でも数少ない寺院である。主夜神の使いが猫であり，江戸中期から黒い招き猫が造られたとされる。[3,27]

招き猫の発祥には諸説あるが，今や日本を代表するラッキーアイテムである。

8. 恐れられる猫

猫の歴史を語る上で極めて特異なことは，前述した通り，家族(飼い主)から愛されて死後には戒名を付けられて墓石まで作られた伴侶動物であったが，一方では，猫股や化け猫などの恐怖や畏怖の対象となっていた動物でもあるので，以下に述べてみたい。

日本における最も早い時期の記載として平安時代の「本朝世紀」(1150年頃)の中に「山猫」と呼ばれる化け物が出現するという形で記録に残されている。[3] 現存する最古の「ねこまた」の記載は「明月記」(藤原定家の日記，1233年頃)に著されている。猫股と呼ばれる獣が一晩に7～8人襲い，死者も多かった。犬のように大きく，目は猫の様だったとある。[3] 京にこの「鬼」が来たといい，沢山の人がこの「病気」に悩まされたという。まるで何かの感染症のような表現である。鬼＝猫股というわけでもないようだ。有名な徒然草の中にも「ねこまた」を扱った部分があるが，これは猫股の話を聞いて夜一人で帰宅した僧が，飼い犬が飛びついてきたのを猫股と勘違いしたというオチのある話である。[3]

しかし，江戸時代の徒然草注釈書の中では猫股これは和名猫(読みは「ねこま」)とある。また，中国金華地方に伝わる化け猫「金花猫」の存在が日本の猫股の認識にも影響を与えている。この地方の猫は3年以上生きると必ず人を惑わすようになり，夜中に屋根に登り，月の気を吸うことを繰り返し，妖怪になるとある。[3]

様々な記録から総合すると猫が老境に入ると不思議な力を持ち，人語を解し，時には化ける。大きさは犬のように大きく，人をたぶらかしたり，食べたりする。金花猫の影響か黄赤の色の猫が化けやすいとする記述もある。また，猫より古くから化けるとされてきた，狐や狸とも通ずるものがあり，有名な狐の妖怪「玉藻の前」(室町時代)の九尾の狐の逸話などからの影響があり，猫は年をとり猫股になると尾の先が2股に分かれると思われて来たようだ。[3]

図10　河鍋暁斎「化猫」 惺々狂斎画帖 第十三図[35, 40)]
歌川国芳の弟子で，狩野派でもあり，卓越した画力と迫力を持つ画家である。

猫が愛され，貴重品として扱われた反面，このように化け物になるという側面をも負わされていたことには，仏教の教えの中で猫という存在はあまり歓迎されていなかった事情があるようだ。本学会誌57号の拙稿「日本における猫の歴史―古代・中世―」でも触れたが，涅槃図にも猫は多くは描かれていないのは，釈迦の入滅の折りに，木の上の薬を取りに行った鼠の邪魔をする悪者の役割を担わされていたことなどが影響しているのかもしれない。

猫の怪談，猫股などにまつわる様々な逸話などは江戸時代に全盛期を迎える。有名な佐賀藩鍋島家のお家騒動の折には，元の佐賀の国主であった龍造寺家の猫が化けて恨みを晴らすといった話しが芝居化され，上演目としても人気を博したのもこの時期である。主家だった龍造寺家と家臣だった鍋島家との「鍋島騒動」は実話であるが，「化け猫騒動」はこれを元にして後世に作られたフィクションとされている。「佐賀の化け猫」は佐賀藩鍋島家のお家騒動を元にして創作された物語で，舞台演目として「花埜嵯峨猫魔稿（はなのさがねこまたばなし）」として上演され，役者絵も刷られた。[32)]

歌川国芳は大変な猫好きとされ，多数の猫の絵を残していることは大変よく知られている。「独道中五十三駅（ひとりたびごじゅうさんつぎ）」が芝居として上演されたときの絵では，行灯の油をなめる猫，手ぬぐいをかぶって踊る猫，老女に化けた猫などが一挙に描かれている。[32)]

図11　歌川国芳「独道中五十三駅」[32]
左右の人物の前方足下には踊り狂う猫が描かれている。

化け猫の話は虚構としては余りにも有名なので，余談になるが，各種の記述や浮世絵などの表現を参照して検討を試みた。先ず，中世の藤原定家の「明月記」に記されている表現をみると何らかの感染症を猫股という形で捉えていた可能性も捨てきれない。

また，浮世絵の猫股が手ぬぐいをかぶって踊るなどの動きや人を襲ってくる記述などを，感染病の症状と仮定して獣医学的に考察すると，当時は大陸との交易で栄えた北九州の出来事なので，鍋島家の化け猫騒動の元になった事件の発端は，狂犬病に感染した猫だった可能性も考えられよう。

古代の記録のように天皇家で大切にされて乳粥をもらっていた時代とは違い，江戸時代の庶民の暮らしの中で生活していた猫は今でいうテーブルスクラップ（残飯）を食事として与えられていたと思われる。庶民の生活の中で蛋白質豊富な食べ物が猫に回ってきたとは考えにくく，ねこマンマは麦飯に味噌汁など炭水化物が主体だった可能性が高い。裕福な家の猫は白飯に鰹節を削って掛けてもらったようだが，そうなると猫は満足して鼠をとらなくなるので，庶民の猫は炭水化物主体の食事で鼠をとるように仕向けられていたようである。[36] 蛋白質主食で脂質を好む猫は鼠もとるが，庶民が使用していた安価な行灯の油は魚油を使用していたので猫は好んだに違いなかろう。

9. 長尾と短尾の猫

江戸時代には平安時代から良いとされてきた長い尾の猫は，その長い尾が蛇

を連想させ，うねうねと動く様が気味悪がられ，しかもやがて尾が二股に割れて猫股になるかもしれないという恐怖から長い猫の尾を断尾していた風習もあったようだ。また，長崎で多いとされる尾曲がり猫はその曲がった尾で幸運をひっかけてくれると言われており，オランダ貿易でインドネシア（バタビア）から長崎に渡来したとされ，今でも長崎を中心に九州ではよく見掛ける猫である。[26,34,38,39]

また，東南アジアや中国南部から長崎に渡ってきた短尾の猫が国内で好まれるようになり，浮世絵でも短尾の猫が描かれるようになった。[32] 短尾遺伝子は不完全優性で発現することが知られているので，世間の好みも相まって江戸あたりまで分布が及んでいたと思われる。[26,34,39]

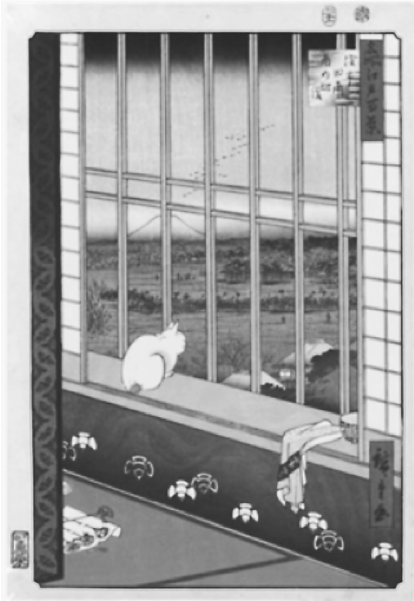

図12 歌川広重「名所江戸百景 浅草田甫酉の町詣」[32]に描かれた短尾の猫。

嘉永元年（1848）作の歌川国芳の東海道五十三次の宿場名を，語呂合わせで猫のしぐさとして描いた「其ま丶地口猫飼好五十三疋（そのままじぐちみょうかいこうごじゅうさんびき）」には，当時飼われていた長尾，尾曲り，短尾など様々な猫の姿を見ることができる。[7,9,32]

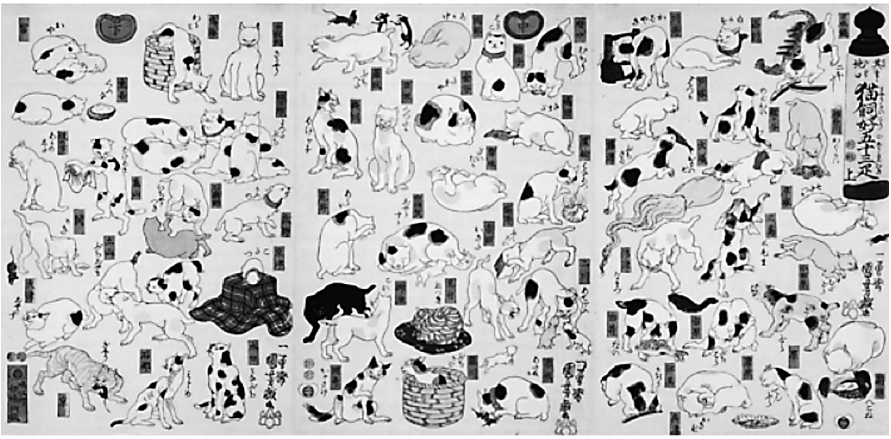

図13 歌川国芳「其ま丶地口 猫飼好五十三疋」[32]

10. 猫にまつわる職業

前述した養蚕を守るために猫の絵を描いて売り歩く職業があったように，猫の蚤取りの仕事があり，非常に興味深い方法で蚤を取っている。猫の「のみ取り」を仕事にする者については井原西鶴の「西鶴織留」に記されている。[3,11] 猫を湯につけて濡らし，狼の毛皮でつつむと濡れた環境を嫌う蚤が狼の毛皮にうつるため，それを大道にうち捨てる。1匹3文だったと記載されている。道にうち捨てられた蚤は再び宿主を求めて人にも猫にも寄生したであろうが，そこはのみ取り屋の計算があったのだろう。また，欧州で女性が毛皮の首巻きをしていたのもファッションと共に，このような効果も期待されていたとも言われている。[12]

また，江戸時代後期の「朧月猫の草紙」には，猫の医師というものも描かれている。これは猫の医者が人間の病を往診で治しに来るというもので，獣医師としての人間が猫を診察したという記載ではない。[3,36,37] 当時の獣医師は馬医だと思われるが，幾つかの書物に猫に与えてはいけないものや猫に与えると良い食品や薬，猫の呈する症状への対処法（お灸他）などが書かれていることから，愛情の対称として存在した猫への日頃からのケアーには関心があったのを伺い知ることが出来る。[3,34]

図14「朧月猫の草紙」[41] 左側の猫の医者が人の患者を往診している。

11. 絵画の中の猫

すでに述べた通り，天下泰平の江戸時代は各種の文化が庶民にまで広まって大きく発展したが，特に浮世絵などの絵画には猫が登場した作品が飛躍的に増加した。今回は紙面の都合で以下に簡単に紹介する。

(1) 十二類合戦絵巻：江戸初期頃に作られたと言われる十二支に並んだ動物と，

並べなかった動物との合戦を描いた絵巻物である。[3,29,30,31] 選ばれなかった狸がこの合戦をしかけるというストーリーで，猫もこの絵巻の中に描かれている。

(2)浮世絵：江戸時代の浮世絵には猫が盛んに描かれており，多数の作者や作品がある。歌川国芳，歌川広重，河鍋暁斎など，今の時代でもその秀逸さ，斬新さ，デザイン性などには目を見張るものがある。しかも，国芳などは猫を描画の被写体としてのみならず，こよなく愛する対象としての視点も持ち合わせているのが伝わってくるようである。作品それぞれに触れるのはあまりに膨大であるため詳しい解説は控えるが，猫は江戸時代のアートに数多くのモチーフとして取り上げられたのである。[31]

図15　歌川国芳「園中八撰花　菊」[32]
竹骨に貼り付けて団扇として使用する目的の絵。猫の満足げな表情がなんとも可愛い。人と伴侶動物の絆を感じさせる絵である。

2020年10月2日付朝日新聞夕刊の第1面に，浮世絵の写真と記事が掲載された。江戸時代後期の有名な浮世絵師で，「画狂人」と呼ばれた葛飾北斎の未公開作品の1つで「芙蓉・猫・花奴」と書かれた猫の絵は，大英博物館が入手したと報道された。[42] 芙蓉の花の前で2匹の猫が睨み合う姿態の細部まで正確に描かれており，争う猫の迫力まで伝わる写実画として世界的な傑作と言うことが出来よう。

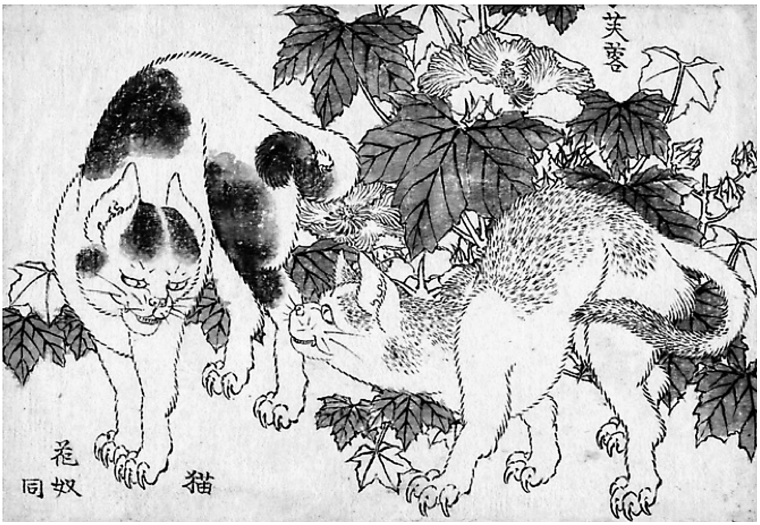

図16　葛飾北斎「芙蓉・猫・花奴」の写真（大英博物館所蔵）[42)]

江戸時代という戦国の世から平らかな世にシフトしたこの時期には，素晴らしい庶民文化が花開いた。この天下泰平の時代に，猫はあらゆる階層の人々の中で，生活を守る実利に，あるときは愛情の対称に，時には畏怖の存在に，人とは切っても切れない縁で結ばれ，その時々の絆を育んで来た。

約1万年前のキプロス島の遺跡から今日に至る猫と人との絆は，誰にも引き裂けないことを強く感じている。

謝辞

江戸時代の猫に関する史料を頂いた日本獣医史学会理事の伊藤一美先生をはじめ関係各位の皆様のご協力に感謝いたします。

文献

1）柴内晶子：日本における猫の歴史―古代・中世―，1-15，日本獣医史学雑誌，57（2020）
2）大島建彦 校注・訳：猫の草紙，御伽草紙集，日本古典文学全集36，小学館（1974）
3）田中貴子：猫の古典文学誌，講談社（2014）
4）藤原重雄：史料としての猫絵，山川出版社（2014）
5）金子信久：江戸かわいい動物，100-105，講談社（2015）
6）小佐々学：猫，犬猫馬，23-26，エプタ71号（2015）
7）金子信久：めでる国芳ブック ねこ，大福書林（2017）

8）黒田日出男：絵画資料で歴史を読む，19-28，筑摩書房（2018）
9）稲垣信一・悳俊彦：江戸猫 浮世絵猫づくし，東京書籍（2018）
10）招き猫亭：招き猫亭コレクション 猫まみれ2，20-27，求龍堂（2015）
11）井原西鶴：西鶴織留 世農人心三巻，国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/info：ndljp/pid/2554438？tocOpened=1
12）農薬工業会：農薬情報局 防除の文明史
https://www.jcpa.or.jp/labo/column/control/05/ 2020年12月20日
13）松浦静山・中村幸彦・中野三敏 校訂：甲子夜話 巻二，平凡社（1978）
14）阿豆佐味天神社社務所：阿豆佐味天神社御由緒書
15）https://azusami-suitengu.net/？page_id=8 2020年12月1日
16）https://ameblo.jp/benben7887/entry-12043414287.html 2020年12月5日，2018年8月12日筆者取材
17）https://www.tabirai.net/sightseeing/column/0006934.aspx 2021年1月10日
18）日本随筆大成編輯部編：宮川舎漫筆4（猫恩を報），日本随筆大成第一期16巻，吉川弘文館（1994）
19）伊皿子貝塚遺跡調査団編：伊皿子貝塚遺跡，日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚調査会（1981）
20）港区立港郷土資料館：開館二十周年記念特別展『江戸動物図鑑―出会う・暮らす・愛でる―』（2002）
21）小佐々学：慶安三年銘小佐々市右衛門前親の愛犬墓，日本獣医史学雑誌，34（1997）
22）小佐々学：日本愛犬史―ヒューマン・アニマル・ボンドの視点から―，日本獣医師会雑誌，66，1（2013）
23）小佐々学監修：義犬華丸ものがたり，長崎文献社（2016）
24）小佐々学：義犬の墓と動物愛護史，日本獣医史学雑誌，54（2017）
25）宮崎良子著：招き猫の文化史，ニューカルトブックス（1988）
26）https://www.konekono-heya.com/news/2016/august/29.html「尾曲り猫」2021年1月20日
27）信ヶ原雅文・石田登志雄：壇王法林寺だん王，袋中上人―琉球と京都の架け橋，淡交社（2011）
28）島津忠重：炉辺南国記，鹿児島県史談会，つかさ書房（1983）
29）https://www.kyohaku.go.jp/jp/dictio/kaiga/juni.html 2021年4月6日
30）住吉内記：十二類巻物 国立国会図書館所蔵本研究会（2020）
31）稲垣進一・悳俊彦：江戸猫浮世絵猫づくし，東京書籍（2018）
32）名古屋市博物館いつだって猫展編集委員会：いつだって猫展（2016）
33）https://gotokuji.jp 2021年5月1日，豪徳寺公式HP
34）平岩米吉：猫の歴史と奇話（1992）
35）池田芙美：のぞいてびっくり江戸絵画，サントリー美術館（2014）

36）山東京山作・歌川国芳画・林美一校訂：朧月猫の草紙，江戸戯作文庫，河出書房新社（1985）
37）山東京山作・歌川国芳絵・金子信久訳著：おこまの大冒険～朧月猫の草紙，パイインターナショナル（2013）
38）https://www.omagarinekogakkai.com　長崎尾曲がり猫学会　2021年12月6日
39）平岩由岐子：猫になった山猫（2002）
40）河鍋楠美監修：河鍋暁斎 その手に描けぬものなし，サントリー美術館（2019）
41）国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10303446　2021年9月25日
42）朝日新聞夕刊・第1面記事（2020年10月2日付）

Summary

The History of Cats in Japan —The Early Modern Period

SHIBANAI Akiko[1]

The author summarized the history of cats in Japan from ancient to medieval times viewed from the perspective of veterinary history in the Japanese Journal of Veterinary History, No. 57, under the title “The History of Cats in Japan : Ancient and Medieval Times.” As a sequel to that report, here she covers the early modern period, known as the Edo period (1603～1868).

As reported in the previous issue, cats were freed to roam unfettered in urban areas by a proclamation that outlawed the practice prevailing until then of keeping cats on leashes. The proclamation was issued by Tokugawa Ieyasu in 1602, the year before he officially became shogun and established what has become known to historians as the Edo Shogunate. Over the subsequent 260 years of peace and prosperity, the Tokugawa political system became entrenched and Japan’s economy and culture evolved and improved significantly. Cats played various roles in Edo period culture and society and many of these were portrayed in the vividly colored works of art that were a hallmark of the period.

Cats were highly treasured animals not only because they protected grain stores and books from rats but also because they kept rats from eating silkworms at a time when sericulture was spreading rapidly and flourishing throughout Japan. Historical records show that the price of a rat-catching cat was as much as five times the price of a horse at times during this period. The number of cats that could be supplied was well short of demand from farmers raising silkworms and people often resorted to using pictures of cats in an attempt to ward off rats. Painted images of

cats also played the role of a charm to protect people from rodent damage, as represented by the painting of A Cat for Rat Deterrence by the famous *ukiyo*-e artist Utagawa Kuniyoshi. The production and sale of images of cats to ward off rats and for charms became a noteworthy industry, while other people made their living removing fleas from cats.

Because cats were beneficial animals, cat spirits were enshrined as deities throughout Japan and they continue to be revered at various shrines and temples to this day. There are also remains and historical documents showing that people of the time organized loving, elaborate burials for dogs and cats that were their close companions. For example, excavation of the site of the former Daienji Temple in Mita, in Tokyo's Minato Ward, uncovered a 37-centimeter-tall gravestone, equivalent in size to that of a middle-class samurai of the time, that was inscribed in 1776 with the words *Kenbyo-no Tou* or Tomb of a Wise Cat. The cemetery of Ekoin Temple in Ryogoku, in Tokyo's Sumida Ward, contains the tomb of a cat renowned for having returned a favor and for subsequently having been laid to rest with all due ceremony in 1816 as an expression of appreciation.

Ekoin Temple houses an old family register that records the names of the deceased and their posthumous Buddhist names. Among those posthumous names, there are 11 for dogs and cats with the dates of their deaths and the names of their owners. All of the posthumous names of the animals contain words expressing the wish that they return as human beings in their next incarnations. Among the 11 cases, four were identified as posthumous names of cats in the period between 1841 and 1852 and it was learned that the burial services for those cats were organized by men who were samurai or merchants. The way in which these posthumous names for dogs and cats were listed side by side with those of humans without being distinguished from them makes it apparent that a close bond between humans and cats already existed in the middle to late Edo period and that these were companion animals. The existence of gravestones and posthumous names for cats, as well as for dogs, can be valuable evidence regarding the history of animal welfare in Japan and the history of human-animal bonds around the world.

Cats were also feared for their wild, instinctive behavior, their agile movements, their eyes that glowed in the dark, their various physical abilities, and their mystically beautiful and flexible bodies. Cats played principal roles in a variety of novels, folktales, paintings, and caricatures, including as *nekomata*, a mythical two-tailed monster cat, *yamaneko*, a ghost cat, and numerous other forms of monster cat. Monster cats were an essential motif in *ukiyo*-e woodblock prints. Utagawa Kuniyoshi, who was

known as a cat lover, was particularly active in featuring monster cats as well as ordinary cats as design motifs in his extensive body of work, and it is no exaggeration to say that he is the representative Japanese artist of the Edo period who turned the cat design motif into outstanding works of art.

In contrast, in Chinese paintings, cats are a symbol of longevity and wealth and there are many paintings featuring a combination of flowers, butterflies, and cats. In Japan, since the Edo period, *manekineko*, which are ornaments in the shape of a cat beckoning with a forepaw, have spread all over Japan as a symbol of good fortune to invite good luck and wealth and this figure continues to be loved by people of all ages. The beckoning cat is one of Japan's most popular lucky characters and has now become a symbol of good luck all over the world.

Ukiyo-e prints and drawings featuring cats are also famous overseas. In the fall of 2020 the British Museum announced the acquisition of rediscovered drawings by the iconic 19th century *ukiyo*-e artist Katsushika Hokusai, who in his day was also known as Gakyojin, which literally means painting madman. The collection includes the masterpiece Cats by Hibiscus, in which two cats are fighting amid hibiscus flowers.

Looking at the 1,000-year history of cats and the Japanese, it seems that no other animal has been so entrenched in people's lives or has fascinated people so much as a friend, an object of admiration, a divine spirit bringing good fortune, or sometimes a mystical, awe-inspiring, potentially terrifying creature.

The more thoroughly the modern history of people and cats in Japan is unraveled, the more interesting historical facts are uncovered one after another. At the conclusion of writing this paper, the author feels more deeply than ever that companion animals such as cats, which provide us with happiness and health, are irreplaceable members of our family here on earth.

1. SHIBANAI Akiko
Akasaka Animal Hospital
2F 4-1-29 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan